

石場神社

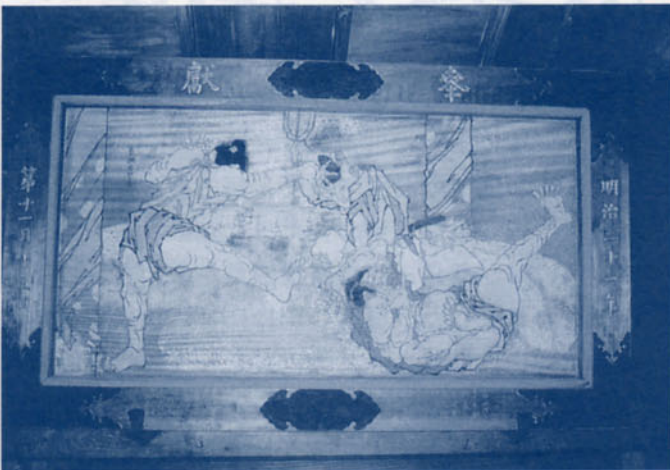
泉山・磁石場の地続きに石場神社があります。この神社は焼き物の原料が産出する石場の守り神であり、地区の氏神様でもあります。

堂内には、明治21年に奉納された相撲の図の絵馬、俳句の書かれた扁額などが奉納してあります。また、境内には焼き物の神様である高麗神が祀られていて、風化し判読が難しくなっていますが、建立した人たちの名前が刻まれているようです。

伊万里市の旧家から、『皿山雀』という古い文書が見つかっています。この文書は、享保16年（1731）に書かれたもので、当時の有田皿山の様子がたびたび記されています。高麗神について「異国の人は絶えているが、わずかに高麗神といって一溪菩薩と号し、後ろに見える松の並んでいる下に勧請して春は年々祭りをしている」と書かれています。



石場神社境内にある高麗神



明治21年に奉納された絵馬



石場神社境内全景

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報

No. 23

辻 喜平次

上幸平の辻家は江戸時代、禁裏御用の窯元として宮中でお使いになる御用品を製造し、納めていました。禁裏御用を命じられたのは、三代喜右衛門のときのことです。安永3年(1774)、六代喜平次のときには宮中へ出入りするために『常陸大椽源朝臣愛常』という官位を賜われています。

九代喜平次は御用品を焼くために、『極真焼』という方法を考案しました。文化8年(1811)6月のことといわれています。『極真焼』というのは、製品と同じ材料でつくった匣鉢に入れて製品を焼成する方法です。匣鉢の蓋をする際に、蓋と身の接合する部分に釉薬を塗り、内部には製品にかけた釉薬よりも先に溶ける釉を塗ります。窯に火を入れ温度が上昇すると、匣鉢にかけた釉が先に溶け、匣鉢は密閉された状態になります。こうして、匣鉢の内外のガスが遮断され、なめらかで美しい地肌の製品が焼



風格が漂う辻家の門構え

きあがります。中の製品を取り出す時は、匣鉢を割って取り出します。ですから、ふつうの匣鉢は何度も使用できますが、『極真焼』で使用する匣鉢は1回きりしか使用できません。九代喜平次はこの考案により、弘化元年(1844)に孝明天皇から紫宸殿図を下賜されています。

現在、辻家は宮内庁御用達の窯元に指定されています。



養 蚕

大正末から昭和の初めころにかけて、農家の副業として養蚕が行われていました。町内には約40戸ほどの養蚕農家があり、自宅の一部屋を蚕部屋にしていました。

この養蚕は一年を通して行っていたものではなく「ハルコ(春蚕)」、「アキコ(秋蚕)」と呼ばれるように、主に春と秋の2回飼っていました。ですからその時期になると蚕部屋にする部屋の畳をあげ、蚕棚を組みました。蚕棚には蚕泊という木箱を何段

もならべ、孵化したばかりの蚕をこの箱の中で飼います。

蚕には、部屋の温度や湿度、餌である桑の葉の与え方など細かい注意が必要だったため、蚕を飼っている家には、毎日一回養蚕指導員が出向き、様子をみてまわりました。温度の調節には、練炭を使用したそうです。桑ばさみで桑の葉を一枚一枚摘み取り、さらに桑切り包丁で蚕の成長の大きさに合わせて、葉を刻み蚕に与えます。こうして1か月ほどで、蚕は繭を作ります。繭を作ると外尾小学校(現在佐賀県陶磁器工業協同組合のある所)に集められ、出荷されました。当時、製糸業は好況で農家のよい現金収入になったそうです。

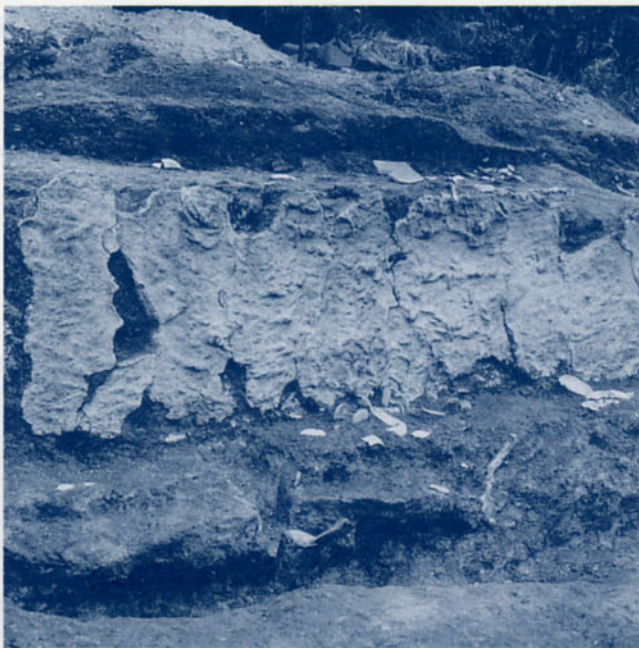
しかし、戦争が始まるころには、桑畑はサツマイモ畑へと変わってしまい、養蚕も行われなくなりました。

楠木谷窯跡発掘調査

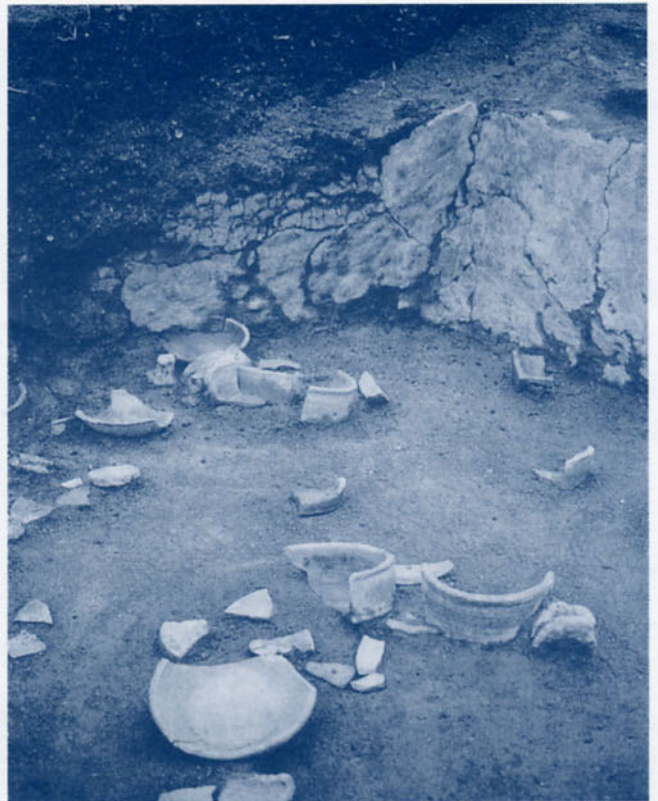
今回は1993年8月3日から11月2日にかけて行った楠木谷窯跡の発掘調査の報告をします。

前回の年木谷3号窯のレポートで「年木山」が泉山付近であったことを報告しましたが、この楠木谷窯も当時（17世紀中ごろ）年木山に属する窯と考えられています。そして、過去2回（1986年佐賀県立九州陶磁文化館、1991年有田町教育委員会）にわたる調査では中・小皿を中心に焼造した窯であり、窯体は2基（1号窯、2号窯）存在したことがわかっています。

ここで前回に続いてもう一度、柿右衛門家文書の赤絵始まりの「覚」を引用しますと、「本年木山に罷居候節、相頼申候故、右赤絵付立申候へ共、能無御座候。」とあります。これは1640年代ころのことです。年木山に属するもう一つの窯である年木谷3号窯（旧窯）では赤絵始まりを思わせるような資料は確認されていません。それでは楠木谷窯はどうか。本焼用である登り窯では色絵製品の出土は稀ですが、色絵素地の出土が赤絵の可能性を示唆してくれます。楠木谷窯跡では過去2回の調査でも色絵素地は多数出土しています。その中には「承応式歳」（1653）の銘がある色絵伝世品と近似した製



楠木谷1号窯跡（第2室奥壁）



楠木谷2号窯跡（第4室床面）

品も出土していますし、今回の調査でも「承応式歳」と染付された製品が数点出土しています。1653年ころには赤絵をやっているようです。それでは柿右衛門家文書に伝えられるように1640年代から赤絵をやっていたか、どうかはまだ確証がありません。今後、出土遺物の整理が進めば結論に近づけるかも知れません。

そして、楠木谷窯と柿右衛門窯はその製品の機種構成、皿の形状、文様など類似点が多く見られます。それは楠木谷窯が廃窯を迎えて、南川原に移動し柿右衛門窯を築いた可能性を示しています。

以上のように状況としては柿右衛門—赤絵始まり—楠木谷窯の三者はうまくつながります。しかし、結論に達するにはなお地道な調査・研究が必要なようです。というのも楠木谷窯が操業していた17世紀中ごろという時代は技術的にも社会的にも複雑な状況を呈しています。技術的には新旧の技術が混在し、社会的にはニーズの大きな変化が起こります。つまり、海外輸出時代の幕開けの時期にあたります。こうした背景の中で柿右衛門—赤絵始まり—楠木谷窯の三者だけを考えてのでは正しい結論を導きだせません。もっと広く有田全体を見渡しながら考える必要性を感じています。

（野上 建紀）

発掘れぼうと

石造物

おめぐりさん

町内で特に多くみられる石仏は弘法大師です。町内には『有田光明新四国』の札所が39か所あります。これらは明治時代に有志が集まり、四国八十八所の四国遍路にならい、西松浦郡（現在の有田町、西有田町と伊万里市の一部）に八十八所の札所をつくり、巡礼を行ったことにはじまるようです。

一般に「おめぐりさん」と呼ばれ、気持ちのある人たちが、毎月10日に「月めぐり（札所の一部をまわる）」を行い、4月と9月には「大めぐり」と称し、6日間をかけて八十八所すべての札所をまわります。また、札所以外の忠霊塔や個人の家などにもお参りをします。

お遍路さんたちは、白い衣服を着て、三夜袋（ずた袋）を肩から下げ、すげ笠を被り、金剛杖をもっています。そして、札所や仏さんを祠である所で自分の名前を書いた紙の札と米、賽銭をあげ、お経をあげます。札所では般若心経、それ以外の所ではご詠歌というふうに、あげるお経も札所とそうでない所では変わります。

遍路さんを迎え、お茶やお菓子、漬物などで振る舞うことをオセッチャ（お接待）といいます。仏さんを祠っている地区の人が当番で接待したり、忠霊塔のあるところでは遺族会の人を迎えています。

今では、祠だけが藪の中に潜み、巡礼の人だけしかお参りしないような所もありました。



接待を受けるおめぐりさん一行

お知らせ

有田出身の儒者・谷口藍田の研究を続けている浦川 晟さん（杵島郡山内町在住）が、このほど研究成果を1冊の本にまとめられました。『儒学者 谷口藍田』がそれで、長年かけて収集された資料が多数収録されています。浦川さんは、「有田の人にもっと藍田のことを知って欲しい」と、資料館をはじめ、中学校、小学校にも著書を寄贈くださいました。とかく焼き物一辺倒になりがちな有田の歴史の中で、窯業以外でもこのように大きな業績を残した人物がいることを思い出させてくれます。有田の方にぜひ手にしていただきたい1冊です。



『儒学者 谷口藍田』 1部 2,500円
著者 浦川 晟 (☎ 0954-45-2090)

白川の清流

紅葉の季節がやってきたと思っている間に、もう師走がやってきました。平成5年もあとひと月を残すのみとなりました。かつて師走は、翌年の雇用契約の更新時期で窯焼きさんと職人さんとの間で、来年の賃金をめぐってさかんに駆け引きが行われたそうです。新年にむけてだんだん気忙しくなりそうです。少し早いようですが、よいお年をお迎えください。来年もよろしく…

(萬)

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報 No.23

発行年月日 * 平成5年12月1日

編集・発行 * 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地1

☎0955-43-2678

街角の歴史